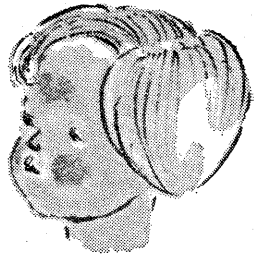
幼児保育の芸術性

倉橋惣三選集　第四巻より

あなたのどこが真に幼児保育者なのか。何があなたを真に幼児保育者とならせるのであろうか。つまりは、幼児保育者の幼児保育者たる真諦は何なのであろうか。こうした問いに対していろいろの答えがあるであろうし、さまざまに答えられるでもあろう。その答えの一つとして、あなたは幼児の心を知る人でなければならぬ。また、あなたは幼児の生活を保護する人でなければならぬ。更にまた、あなたは幼児の生活を導く人でなければならぬ。いずれも、幼児保育者として、欠くことの出来ない研究であり、仕事であり、教育である。その必要と重要とは、あらためていうまでもない。そのひとつひとつが、それぞれ大切なことであり、それぞれとして貴重なことである。しかし、これらのそれぞれが幼児保育でないのはもとより、これを合わせただけでも幼児保育になるものではない。これらの一つを欠いても、幼児保育は完う(まっと)せられないが、これらが揃っているからとて、それで幼児保育が完い(まった)ものではない。――というのは、これより以外になお必要なものがあるというのではなく、これらを包括し、これらを積載し、これらを糾合する、もっと大きく、広く、深いものがありはしないのかという問題である。わたしは、それを、幼児保育の学問性、社会性、教育性に対して、幼児保育の芸術性という言葉であらわそうとする。ただし、芸術性という言葉は、必ずしも簡明な言葉ではない。その各々の面にそうて、ちがった意味を持たせられる。芸術の本質である美ということにしてさえも、極めて浅



いところ、甚だ浮いたところで解せられたりすることがある。すなわち芸術的とは、随分あいまいに使われたり 偏して用いられたりする言葉であるが、わたしがここでこの言葉によるのは、その渾然たる非分離性、全的な融合性に基づいてである。――またしても窮屈な言い方になったが、理屈や必然や目的を超えたうっとりした境地としての意味においてである。うっとりといって、理屈や必要や目的を捨てているのではない。あるいは必ずしも忘れているのでもない。それらをすべて包括し、積載し、統合していながら、それらに分離しない前の、また、それらを一つに融合している境地という意味である。芸術にも、音楽にも、学問性も社会性も教育性もあるのであるが、美術音楽それ自身の本質は、それらそれぞれの寄りあいでも寄せ集めでもない。一個の芸術である。すなわち、その本質は芸術性である。そうした意味あいで、幼児保育も芸術性をもつものであり、芸術性をもつのでなければならないと、そういおうとしているのである。

児童心理学は、幼児の心を理解させてくれる。今日において、児童心理学の研究なしには幼児の心は理解出来ないといっていい位である。がしかし、理解だけでひとりひとり幼児の心に触れられるものだろうか。それは、どうしても芸術性（前にいった意味で）のものでなければ出来ない。児童心理学で、幼児と共に泣けるか、一つ心に喜べるか、また、社会現実の逼迫感が幼児保護の急務に赴かせるのも常である。その現実に対する直視と憂慮とから、周到と懇切の感謝すべき多くの社会保護が生まれる。がしかし、その事業的周到だけでひとりひとりの幼児の心を幸福にし得るものであろうか。これまた、どうしても芸術性のものでなければ出来ない。というよりも、保護が幼児の心を幸福にしているのは、いつでも、単なる保護のみでない芸術性によっていることなのである。それは愛ということであるといってもいい。

愛こそ最も高貴な（恐らく最も美な）人間芸術なのである。更にまた、教育的理想は、幼児指導の目的を発せしめ方法を工夫させる。保護と相俟って必須なのは言を俟たない。がしかし、目的と方法だけでは、一人の幼児をも抱くことも出来ないし、幼児を親しませることも出来まい。これまた、どうしても芸術性のものでなければ出来ない。というよりも、目的と方法とによる指導を真に教育ならしめ得たるものは、その芸術性に他ならぬのである。こう考えて来て、あらゆる場合、幼児教育を真に幼児保育ならしめる本質とは、その芸術性であるといえる。

幼児の研究は大いに進歩した。幼児保護の必要は日々われわれ

を駆り立てる。幼児教育の重要は愈々明確を加える。これによって、幼児保育は、学問的に、社会的に教育理念的にまた教育技術的に発達する。幼児の福祉上教育上まことによろこぶべきである。この発達は一日も忽せにしてはならぬ。このよろこびは、益益、拡大されなければならぬ。がしかし、これだけで、幼児保育の芸術性が充実されているとは簡単に考えられない。もし危倶の目を以てすれば、幼児保育の学問性、社会性、教育性が強調され、急に前へ押し出されることによって、その芸術性が微弱化され、時に後ろへ置き去りにされることはなかろうか。根がうっとりを特質とする芸術性である。うっとりはうっかりにまぎらわしく、うっかりをうっとりと取りちがえないとも限らない。――が、――それでは決して真の幼児保育があり得ない。

幼児保育の芸術性を、はっきりと定義することはむつかしい。名画の美を言葉で説明しつくせないと同一である。しかし、それを的確に見ることは出来るし、把握する（芸術的に）ことも出来る。たとえば、コメニウスや、バセドウや、フレーベルの著作や生涯に、それを感得することは誰にでも出来る。丁度名画や優れた音楽の中に感得し得る如く、その芸術性にうっとりとさせられる。他の言葉でいえば酔わせられるところがある。それは古典的なことに他ならぬといわれるかもしれない。あるいはそうかもしれない。現代の学問も、社会事業も、教育も、理論と必要と方法とが先へ先へと進むことによって、その本質としての芸術性が、追いつき兼ねているときがある。忙しいものの免れ難いところであるかもしれない。しかし、その現代にあっても、真の保育実際の中には、それらの諸性を超えて、うっとりとした境地に酔うものも少なくないし、酔う時もしばしばある。如何に芸術性の少ない、あわただしく、またかわききった今日のわれわれであるとしても、幼児の方は、変わりなくいつも芸術性そのものだから、それに化せられずにいないのである。心理学を考えながら近づいていっても、幼児は超心理学で飛びついて来る。事業施設として集めても、幼児は被保護者としてでなく我がままもいえば、いたずらもする。あまったれて来るに至っては全て芸術的であり、それにつれられて溶けてゆく瞬間は全く芸術的である。教育で教育を考えている人でも、遊びの中に誘い込まれてうっとり遊んでいる姿には、芸術的なという言葉以外の言葉では形容出来ない姿が出る。それはしばしば若い先生の姿であり、老熟（老巧ではない）の先生の姿であり、それに見とれているわれらの姿でもある。なんという嬉しい姿であろう。姿というよりも、幼児の喜びと幸福とであろう。――それに比して、芸術性のない保育の、なんと幼

児につまらないこと、不幸なことであろう。

幼児保育の芸術性は、それ自体が芸術性の持ち主である幼児から与えられずにいないものでもある。しかし、折角の名画や音楽に、芸術を感じない没趣味もないでもない。無感動の不風流漢にとっては、どんな豊かな自然美も芸術にならない。そういう先生にあっては、幼児もたまらないし、保育という貴い芸術も、功利以外の何ものでもなくなる。あじけない至りというよりも、許し難い冒瀆ともいえよう。そういうことのないためには、われら自らに芸術性の持ち主、保育をただの仕事でなく、その趣味に溶け込み、うっとりと酔い得る性を持つ人でなくてはならぬ。言いかえれば、保育を何のためにし、如何にせんと考えるほかに、保育を楽しみ、保育に没入し得る人でなくてはならぬ。そういう先生と幼児との間にのみ、何ともいえない保育芸術——保育学、保育事業、保育技術以上のもの——が創作され来たるのである。その保育そのものが芸術になるのである。その場合、その先生の心境は、画家が描き、音楽家がうたい、詩人が詩作するのと同じであり、恍惚として我をその生活のうちに満たしつづけるであろう。前に、コメニウス、バセドウ、フレーベルの保育画面を偲んだのも、そうした美術的価値にほかならない。それらの画面には、幾多の大きい価値が含まれていると共に、一大芸術としての渾成に頭が下がるのである。

ただし、これらはいずれも稀世の大芸術品である。そんな大作でなくても、小品は小品なりに、短章は短章なりに、小さいながら純芸術品の本質をそなえるものがある筈である。そうした芸術性が、幼児のあそびを観察している瞬間にも、幼児の爪をとっている窓ぎわにも、幼児の自由画の手さきを見つめている机の上にも、ふと動き、しみじみとつづいて貴い小芸術品を成すことがある。もしそれが日々に連続し、園一ぱいに拡がれば、その人は、身を以て保育を芸術的に創作しつづけている人となる。たまに色のぬりそこないがあり、線の描き誤りがあったとしても、その純乎たる芸術創作としての価値は、ただ正しく、ただ細緻に、ただ上手なだけの非芸術品にまさること、如何に大であろう。そうして、その美しい作品は、古典の大作に例を求めるまでもなく、若い保育者の、その日その日の保育の中に見出されるものである。——ただ、現代的な保育画面が、徒に大がかり大仕掛であるのみで、粗大、空虚、頓と芸術性の乏しい憾みが稀でないのを、なげかずにいられない。

再び初めの問いにかえる。あなたのどこが真に幼児教育者なのか。何があなたを真の幼児教育者にならせるであろうか。つまり

は、幼児保育者の幼児保育者たる真諦は何なのであろうか。

前にしばしば、名画名音楽といったことから例をとる。レンブラントは名画を制作した芸術家であった。ベートーベンは名音楽を作曲した芸術家であった。ただ絵描き、ただ作曲家ではない。芸術家であることが、その本質であったのである。勿論、絵と音楽とにおいて、その芸術性を発揮した。しかし、芸術家たることが、その奥底の真諦であったのである。こうした特異の大芸術家を例にとらないでも、芸術家が描いた絵だけが真の芸術であり、芸術家が作った作曲だけが真の芸術であることは論を俟たない。そこで、あなたは幼児保育者という人間芸術家である。人間を最も深いところ、最も純なところで相手とするものは皆人間芸術であるが、他の場合は芸術的なだけには止まり得ないことが多々あるとしても、幼児を相手とする場合は、その芸術性は最も深いといえないかもしれないが、最も純なるものである。その最も純な芸術性が幼児保育の真諦であり、あなたの芸術性があなたを真に幼児保育者にするものであり、あなたはあなたの芸術性を以てこそ真に幼児保育者なのであると、こう答えても過言であるまい。少なくとも、あなたの保育を真にし大にし高貴にするものは、あなたの学問性、社会性、教育性のほかに、あなたの芸術性（ここでわたしの言う意味でで）あらねばならない。

（昭和二十三年六月「幼児の教育」第四十七巻第六号）

〝幼児保育の芸術性〟をめぐって

森田　宗一

いつも私が「いいなあ」と思いよく話すことは、しあわせ感に満ちたお母さんが〝イナイイナイバー〟と赤ちゃんをあやしている光景である。

お母さんは幼い子どもをみつめながら顔一ぱいに笑みをうかべ、時には百面相しながら〝イナイイナイバー〟とやる。赤ちゃんはそれに応えて、顔を一ぱいに笑でうずめてニコニコキャッキャッとする。手も足も体全体を動かして笑う。その光景のなかに母と子のすばらしい人間的な出会いが、躍如としているように思う。

人間が最初に人間的な情緒やしぐさを学ぶのは、お母さんのお